

阿品弥山の信仰

宮田伊津美

1 弥山信仰の始まり

「玖珂郡誌」に 「往昔、行基大菩薩 名山霊場ヲ跋涉ノ時、当村ノ神辺へ弥山ノ嶺ニ阿字現ス。依之怪石巉岩ヲタドリテ頂ニ攀登リケレバ薬師如来出現ス」とあり、奈良時代に霊場として登場したかのように書いてあるが、それはさておき かなり古くからその険しい山故に 霊場あるいは信仰の対象となっていたように思われる。理由付けのため、行基がここに担ぎ出されているのは、彼が民間に信仰を広めるため歩き回ったという 言い伝えからであろうが、むしろ修験道の開祖といわれる 役の小角（役の行者）の方がふさわしい。

現に 阿品には 修験宗の 金剛院があった。 註1

ともあれ 弥山のおこりは 「玖珂郡誌」が引用している 「西遊旅潭」の 「弥山嶽トテ山高ク 甚険阻ニシテ石ヲ踏テ登コト廿一丁余、。絶頂に堂アリ。山ノ神ヲ祭ルヨシ。」と云う如く もともと阿品村に存在した民間信仰の一つである 「山の神信仰」であると考えられる そして之を裏付ける記述が やはり「玖珂郡誌」に載せられている。

「里俗説」ニ （中略） 早声（さこえ）トテ五月早苗ヲサスヘキ頃、弥山ノ辺ニ当テ 田植歌ノ声聞ユ。此ノ声ヲ聞キテ村中ノ稲ヲ植ル期トス」

農村一般や 山間の出稼ぎ人などの間に広く信仰されていた 山の神信仰となんら変わるところがない。従って、最初は 阿品村というごく狭い範囲の農業の神としての「山の神」を祀る小さい祠が建てられていたのであろう。

弥山のその後の経過を「玖珂郡誌」で見ると 一時 祠は荒れていたらしく、享保年間に長楽寺住職 宗高和尚が 弥山社を重興して 護法神としたという。このとき以来、長楽寺の鎮主となったのであろう。 明和七年の夏に旱が続き、村民が祈雨すると 雨がふった。翌年 又 旱が続き 藩庁の命で雨乞いをするとまたしても 雨が降った。その後 藩主に願意があり、此度 神助を賜うことができれば 神祠を新しく建替えて 神徳に報いようといつて 七日間 ある僧に読経させ 供物を供え祭祀させて祈らせた。するとたちまち 願意の如き霊験あった。そしてこのうわさが 人々の口から耳へ、耳から耳へと広まり、近くは防長安石、遠くは 四国九州から参詣者が続々とやってきた。そして、先の約束の通り、藩の手で 明和九年（1772）の春 神殿と拝殿が新築された。そして長楽寺四代住職 器大成の先師峯老人は 神殿を感応殿と名づけ、そこに祀ってある神を至聖護国善神と呼んだ。そしてその神の肖像を彫刻させて神殿内に安置した。

「岩邑年代記」の明和四年の条に 次の記述がある。

「阿品弥山発向、釣鐘上ル。元来ガゞ尼ノ上ニ到而小キ社有之候処、村中ヨリ雨乞イタシ 感応有之。ソレヨリ俄ニ 御流行、只今之通りニ成ル」

この記述によったと思われる「岩国沿革志」の記述は 次のとおりである。

「是哉（明和4年）阿品村弥山社 参詣甚盛ニ相成リ釣鐘ヲ上ルナリ。

此ノ社 本ハカバラ尾ニ有シ処 小キ堂ナリ。 村中ヨリ雨乞イタシ感応イタシトテ、俄ニ流行シ只今ノ通りト成ナリ」

これからみると 初めは 弥山道の中程のところの ガバラ尾というところにごく小さな祠が建てられていて これが阿品村の山の神が祀ってあるところであった。ところが明和四年以前に 村民が雨乞いをする。靈験があり、それがうわさとなって四方に広まり、急に弥山参りが流行して 祠も山頂に移され、釣鐘まで奉納されたと言うことになる。明和九年四月頃にお祓い札が降ったということがささやかれ、御蔭参りが流行した。(岩邑年代記)ということから考えて ちょっとしたきっかけで流行する下地は民衆の中に潜在していた。そこへ靈験あらたかという うわさが流れたので、弥山信仰が急に流行したのであろうそしてその後 幾年もたたずして 藩庁からのてこ入れもあり いよいよ弥山信仰は庶民の間に定着したようである。

前述の 「玖珂郡誌」に載っているのは 安永九年に長楽寺の四代目住職 大成和尚の書いた弥山社の縁起であるが、これには明和四年の記述がない。両者を一緒にして改めて考えてみよう。

「岩邑年代記」の宝暦十二年(1762)の項に次のようにある。

「1、四月ヨリ七月 大旱。

1 に付き 御領内田作植付不相成所、凡そ壺万石計も有之候由。当秋御所務落六千石計有之たる由」

おそらく阿品村もこのときは 旱で田植えができず苦勞したであろう。そして村を挙げて雨乞いをし、何とか救われたのではあるまいか。そして村人が 「山の神」に感謝して宝暦十二、三年頃 ガバラ尾から山頂に移しその靈験のうわさが四方に広がり、おいおい参詣人も増え 五年後の明和四年には(1767) 釣鐘が奉納されるまでになったのであろう。そしてそういう実績があつて、その上に 明和七年の 旱魃の時再度 靈験があり、翌年の旱魃の時には 藩令があつたのであろう。

2 弥山信仰の隆盛

ともあれ 明和年間にその靈験があらたかなることをもって 急に流行し、世間に信者を広めていったのであるが、現在残っている弥山関係の石造物(道標、灯籠、鳥居等)からみると次のことがわかる。

年号のあるもので、最も古いものに 安永二年(1773) 6月の石灯籠がある。

火袋と胴が元のもので、笠と宝珠は 後のものである。又 胴も下1/3 位が折れて無くなっている。すべては読めないが「願主石州〇〇」とあり この頃 すでに石見の国からの参詣者があつたことが知られ、前記の「玖珂郡誌」中の ちかくの防長安石遠之 四国九州 造詣者終繹無虚日焉。」ということが思いだされ、縁起の中のこの記述もそんなに大げさなものではないように思える。

弥山信仰が流行して 参詣人が増えてくると 登山道を整備せねばならない。

まず、山頂までの道が明和末から 安永初めには整備されたようである。

山の麓の鳥居から山頂までは21丁であるが、1丁毎に 雲に乗った地蔵の坐像を刻んだ道標が建てられているが、これには 2丁目の 『安永ニ 巳 十月十四日』の年紀を除いて

年号が示していないが、全部同じようなものであり、安永二年前後のものであると考えられる「十二丁」などと道程だけ示したものもあるが 地名、人名のわかるものをあげると 次の通りである。

願主 玖珂本郷 天金屋 弥八

錦見町人 二人

柳井玖保町連中

錦見町 申歳男 亥歳男 寅歳女

柳井端場連中

柳井亀岡町連中

柳井亀岡町 丙子歳

施主 川原町 嘉作 有舅 吉祐 作諫 吉伝 紙彦

施主 守内村中より

今浦北横町連中 (柳井)

願主 錦見本町 菱屋忠蔵 白銀屋安衛門 松重屋嘉七

施主 田原村中

施主 和木村七良左衛門

芸州 佐伯郡大竹上組 石見屋清左衛門 長崎屋勘左衛門

願主 大竹村 下組 十人ヨリ

柳井が圧倒的に多く、しかもある程度の人数が集まって寄進していることがわかる。

錦見町や川原町は、近い割りに少なく、しかも少人数で寄進している。

信仰する場合の形態に違いがあったのかも知れない (たとえば 柳井では弥山講を作っていたとか)

北は和木・大竹・南は玖珂・高森 (海岸部は柳井) 西は河内くらいの範囲を中心としてたとえば 天明八年 (1788) に岩国を通過した 司馬江漢のように 旅行者で弥山に参詣する者もかなり。あったようである。あるいは先述の安永二年 石州の人は弥山に参り願をかけそれがかなえられたので そのお礼に灯籠を寄進し他のかもしれない

そして天明八年二月には、阿品村の伝三郎が中心となり 新天連中が近在から寄付を集めて登山口に石鳥居を建てた。

弥山信仰は縁起にもあるように 岩国藩士の間にもかなり広まっていたらしく、寛政六年には (1794) 藩主の命で 樋口豊が詩文を作り、弥山の神徳をたたえ多田の古市に鳥居を建てた。封建制下においては 藩主は絶対であり、藩主が弥山崇敬を態度で示せば、家臣、庶民は それに従うことは当然考えられ、いよいよ弥山信仰は広まったものと思われる。そして 寛政十年 (1798) から 阿品と多田の村境から弥山登山口まで 廿丁の道が整備され 文化年間の末頃までには 一丁ごとに道標が建てられた。

現在二十一基のうち十四基が残っているだけであるが うち八基は地蔵の立像で 五基は文字だけ。 村境の一丁目の道標は中でも一番古く、(寛政十年)。規模も他のものが 110~140cmくらいであるのに対し 190cm近くもあり これだけが 雲の上の地蔵である。多田村から火事の悪霊が入ってくるのを防ぐ火伏せ神をかねている。

残存しているものは 二丁目が享和三年 (1803) で残りは文化二年から 文化十二年まで 大体年代順に並んでいる。

そして そこに示された地名、人名を書くと 次の通りである。

願主 戌之歳男

願主 河上氏建立

新小路町 丸○屋貞四郎 ■■■屋藤治良

川西町 和久屋安右衛門

本町二丁目 對馬屋

福島屋友蔵

未歳男 辰歳女

田辺屋又兵衛

多田邑 白銀屋■

ニ井屋■

和久屋兵衛

大部分岩国町の人であり、しかもほとんど単独でしている。

やはり 講を作ったの信仰というものは 岩国町には無かったようである。

又、村境から登山口までの道の整備とともに登山道の改修も寛政十一年（1799）

九月から 齋宮屋喜兵衛の手によって行われた。

又、杭名からの登山道もこの頃整備されたものらしい。

ここにも 道標が一丁毎に建っていたようであるが 大正十四年の大改修等で そのほとんどは現在 なくなってしまった。三十一丁と三十三丁とが残っている。

その道標の形態・文字の書き方からみて 文化年間 阿品道の整備と 時を同じくして 建てられたものと考えられる。そしてこれには 表に「高森町人」側面に「世話人 船津屋久蔵」とある。これだけからでは何とも云えないが、杭名道の方は 玖珂、高森、柳井の町人が中心となっていたのではないだろうか。

江戸時代の弥山関係の灯籠もいくつか残っている。それらを列記すると次のようになる。

寛政八年丙辰九月吉日

万人講中 世話人当邑 助左衛門

文化五 戊辰正月吉日

文化八年未正月吉日 富永氏

文化十四年丁丑八月吉日

願主 秋本貞蔵

文化二年 卯十月吉日 岸元藤左衛門

やはり 文化年間に集中していることがわかる。

此れまでに あげてきた残存石造物をまとめてみると、岩国町の場合は初めから 先述したように 弥山信仰の講などというものは 存在しなかったらしく 単独 あるいは少人数で 寄進している。寛政年間に限って 岩国町を除外して考えると 「村中」とか 「連中」とか 「講中」とかいったものが多く 集団で弥山信仰する傾向があったようだ あるいは 経済力が岩国町の町人に比べて劣ったので 集団にならないと寄進ができなかったという面があったのかもしれない。そして岩国町を含めて、文化年間の中頃までは 「戌之歳男」とか 「願主敬白」とかにして 個人名をださない傾向にあり、文化中期以降は 個人名を はっきりと記し しかも単独で寄進している。

町人の経済力が全体的に強大化した、あるいは 信仰態度の変化（信仰の形式化、遊芸化）した現れであろう

ともかく 寛政から文化文政にかけて 弥山信仰は隆盛し、その頂点を極めた感がある。

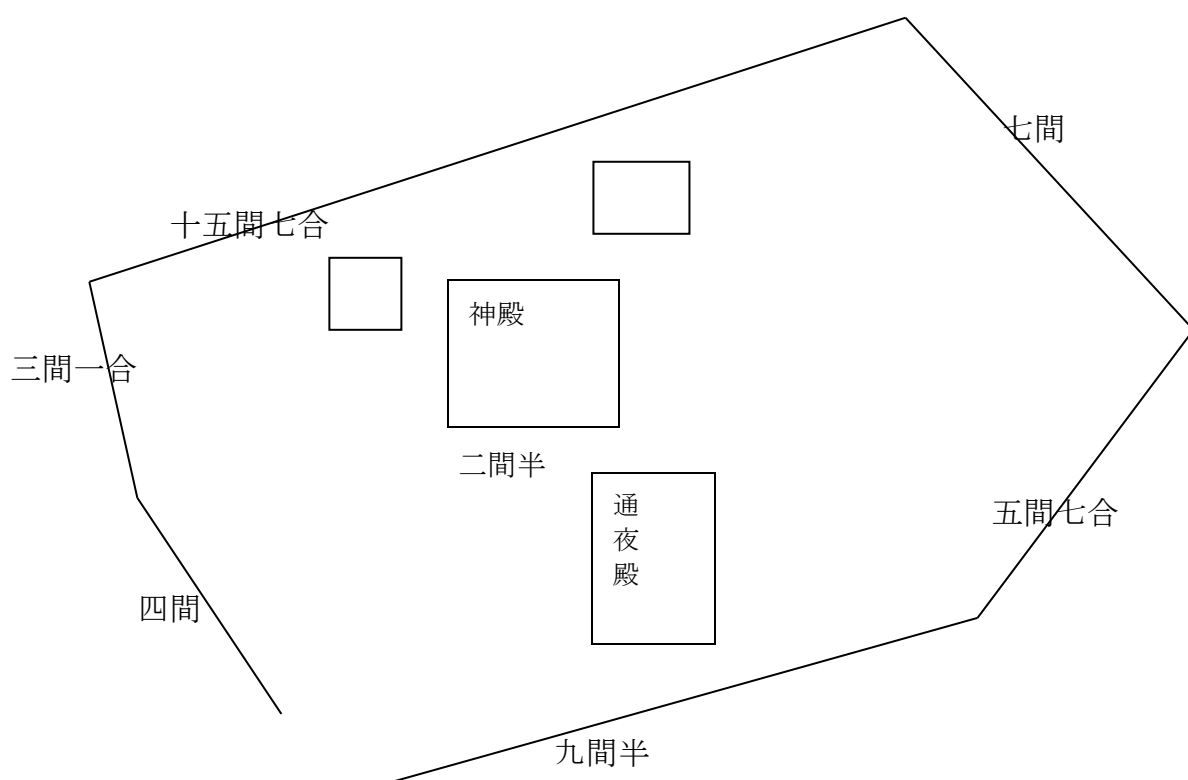
3 弥山の社の規模

阿品村のガバラ尾に祀っていた頃の祠は どの程度のものであったか知るすべもないが せいぜい半間四方くらいのものであったろう。 そしておそらく 宝暦十二年に 山頂に移され 多少 規模が拡大され 弥山信仰が流行して 明和四年に釣鐘が寄進され鐘突き堂ができた。

明和九年二月には 藩の援助で神殿と拝殿が新しく拡大再建され その規模は確定した。 明治五年の「寺院明細書」や明治三年の「本末寺号其他明細帳」など後世の記録がこの時を創建としていることから 規模の確定が考えられる。その後いよいよ流行していくなかで通夜殿もできたようである。

明治元年三月 神仏混交禁止令が出るまでは 弥山社と称していたが 長楽寺の抱えだったので 佛堂にされてそれ以降は 弥山堂と称すようになった。

明治六年の「玖珂 大嶋両郡無石之現社寺敷取網図面」という帳に載っている社は次の通りである。



そして明治十三年の「神社明細帳」を見ると 弥山堂として

「本堂二間半×二間 仏体安置堂一間四方 釣鐘堂一間四方 庫裏 二間×一間半」とあり 本堂が拝殿、仏体安置堂が神殿、庫裏が通夜殿とほぼ一致している。この形態がいつごろできたか 明らかではないが おそらく 極盛期の文化年間ではないかと考える。

(註1)

「西遊旅潭」は 天明八年に 司馬江漢が長崎へ行くときに書いたものであるが 彼が岩国へ来たときには すでに弥山信仰は流行しているときであり、彼も登って行ったのであろう。そしてその辺の人に 何と言う神が祀ってあるのかと尋ねたら 以前から祀ってあった 山の神の名を出したのであろう。

そして弥山は 何よりも雨乞いの信仰対象であり、それ故、農業と深い結びつきを持っており、やはり、いつまでたっても 住民にとっては「山の神」がそこに祀ってあることになるのである。